

学位論文題名

福祉の現場における「共生」に向けたコミュニティの生成
－ 福祉現場のエスノグラフィーから －

学位論文内容の要旨

本論文は、交通事故や転落事故等によって身体に大きな損傷を受けながらも近年の救命救急医療の発達によって命が救われ、脳の高次機能部分に損傷を受けた高次脳機能障害者の支援と活動の場の生成・変容の過程に焦点を当てたものである。高次脳機能障害者の多くは脳外傷、脳血管機能障害などの後遺症として、記憶障害や注意障害、遂行機能障害、社会的な行動の障害などを伴い、就労復帰に多くの困難を伴っている。この論文では、このような問題を抱えた高次脳機能障害者の生活を支える場として当事者とその支援者によって創られた小規模作業所の活動とその変容の過程を長期的な参与観察と共同実践の分析から明らかにしたものである。これまでコミュニティの活動を共同実践として捉える実践共同体論が知られているが、これまでの実践共同体論では当事者の共同体への参加の軌道や、共同実践の意味の共有過程、さらには当事者と支援者による実践と共同体の性質そのものの再構築といった過程については十分に論じることがなかった。本論文ではこれらの研究成果を生かしながらも、これらの諸問題について、実践に参加している人たちの活動の分析を通して新たな解釈のための理論的枠組みを提示したものである。本論文は序章と終章を含めて全部で8章によって構成されている。

第1章は、はじめに本論文の研究対象である高次脳機能障害者の障害の現実とその生活実態、そしてその支援体制の現状と課題を論じた。この章の後半では、本論文におけるフィールドワークの概要と分析方法について述べている。

第2章では、高次脳機能障害者のための支援の方法として十分な体制が整備されていない段階で支援施設の先駆けとして設立されたA作業所における実践の内容とその課題について、この作業所に参加している当事者の日常的活動の分析から明らかにした。A作業所は、高次脳機能障害者が一時的に過ごすための場と、就労の場という二つの性質を共存させながら活動を展開していた。しかし、作業所が二つの異なった性質と目的を持たざるを得なかったために、作業所の実践を共有することを困難にしたり、この実践の場に参加している障害者が参加の意味を見出すことが出来なくなるといった課題を抱え込むことになった。このA作業所の分析からは、障害者が抱えている障害の内容と現実を曖昧にしたり、作業所の目的を明確に持たない状態では、実践共同体の新しい実践と体制の再構築という創造的な変革の可能性を見出すことが出来ないことが明らかになった。

第3章では、A作業所と同じく高次脳機能障害者のための支援施設として新たに設立された作業所であるR作業所の実践と、作業所としての目的とその性質を変えていった経緯を分析しながら、R作業所に参加している障害者の実践活動と参加の仕方の変容を詳述した。第2章のA作業所と同様に、R作業所もその作業所の目的やメンバーの参加目的が曖昧で、

メンバーにとってはこの作業所は自分ができる範囲で仕事をすればよい所であったり、社会復帰までの一時的な「居場所」という意味を持っていた。しかし、この R 作業所はメンバーの実践の意味を共有し、新たな共同体としての目的と活動の意味を変えていくような大きな変革を行うようになる。この章では、作業所のおよそ 10 数年間にわたる変容の過程を共同体の実践変化の分析を通して明らかにしていった。

第 4 章から第 6 章までは、R 作業所が小規模作業所として開始した設立当初から、今日の就労継続支援 B 型事業所へと変わっていった中で、この共同体の実践の意味を当事者とその支援者がどのように共同的な活動によって作り替え、また新しい活動のシステムを構築していったのかを日常の活動の詳細な分析から明らかにしていった。

第 4 章では、R 作業所の設立当初、ここに参加している当事者の生活の実態と、彼らが作業所をどのような存在として位置付けていたのかを分析した。特にこの章では、記憶に障害を抱えている高次脳機能障害者が生活の場である R 作業所において記憶の障害が顕在されたり、逆に障害が見えなくなっている状況とその意味を分析した。この作業所では、設立当初は授産活動を積極的に位置付けことが出来ずに、息抜きとしての居場所という意味合いを持っていたために、生産活動を行う場合には不可避免的に伴ってくる記憶障害という現実を回避してしまうことを当事者も支援者も行っていった。このような単に人が集まっているだけで、共通の活動と目的を持つことがない共同体では障害を相互に認識し、それを共同的に克服していくという方向に向かうことはなかった。その後この作業所は大きくその性質を変えていくが、この経過を詳細に分析したのが第 5 章と第 6 章である。

第 5 章では、R 作業所が障害者自立支援法によって小規模作業所から、地域活動支援センター、そして就労継続支援 B 型事業所へとサービス事業を変更していったことに伴いながら、当事者そして支援者が積極的に就労の場として位置付けていくようになる。ここで起きていたことは、短期間で受注した製品を完成させるという具体的な作業の目標が生まれたことで、共同体に参加している者の様々な経験や技能を使いながら、共同的な活動を組織化していくことであった。このような現実的な課題解決が求められる中では、障害の現実とそれを相互に認識し、それを共同的に解決していくという障害の共同的な克服が可能になった。

第 6 章では、参加メンバー自身が自主的に作業に積極的に関与するようになり、彼ら自身の手によって共に働く場を形成していった過程を分析している。ここでは、障害の程度を考慮しながら効率的な作業の分担が計られた。また、新しい商品の製作のために必要な作業内容についてもメンバーが共有出来るような内容の表示、さらには記憶の障害というハンディキャップを克服していくための作業工程の可視化といった様々な工夫がなされ、実践されていった。このような参加メンバー自身による共同的な活動への参加を可能にするシステムの構築がメンバーの関係性と参加の形態を大きく変えていくことになった。

終章は、本論文全体のまとめである。R 作業所が設立当初の異なった目的を持って集まった人たちが一時的に過ごす居場所から、働く場所、就労の機会を提供する場へと変化していったが、新しい目的の下で障害を障害として相互に共有し、障害を克服する様々な工夫を当事者自身が作り出していく新たな実践が展開していった。この実践共同体の変容とそれを可能にした要因を明らかにした本研究の結果は、今後の高次脳機能障害者の支援のあり方を考えていくための一つの方向を提示するものである。

学位論文審査の要旨

主査	特任教授	佐藤	公治
副査	教授	間宮	正幸
副査	教授	岡田	敬司 (京都大学大学院人間・環境学研究所)
副査	准教授	松田	康子

学位論文題名

福祉の現場における「共生」に向けたコミュニティの生成 － 福祉現場のエスノグラフィーから －

本論文は、交通事故や転落事故等によって身体に大きな損傷を受けながらも近年の救命救急医療の発達によって命が救われ、脳の高次機能部分に損傷を受けた高次脳機能障害者の支援と活動の場の生成・変容の過程に焦点を当てたものである。高次脳機能障害者の多くは脳外傷、脳血管機能障害などの後遺症として、記憶障害や注意障害、遂行機能障害、社会的な行動の障害などを伴い、就労復帰に多くの困難を伴っている。この論文では、このような問題を抱えた高次脳機能障害者の生活を支える場として当事者とその支援者によって創られた小規模作業所の活動とその変容の過程を10数年にわたる長期的な参与観察とその分析から明らかにしたものである。

第1章は、はじめに本論文の研究対象である高次脳機能障害者の障害の現実とその生活実態、そしてその支援体制の現状と課題を論じ、問題の所在を明らかにしている。この章の後半では、本論文におけるフィールドワークの概要と分析方法について述べている。

第2章では、高次脳機能障害者のための支援の方法として十分な体制が整備されていない段階で支援施設の先駆けとして設立されたA作業所における実践の内容とその課題をこの作業所に参加している当事者の日常的活動の分析から明らかにした。A作業所は、高次脳機能障害者が一時的に過ごす場と、就労の場という二つの性質を共存させながら活動を展開していた。しかし、作業所が二つの異なった性質と目的を持たざるを得なかったために、作業所の実践とその目的をメンバー相互が共有することが出来なくなるという課題を抱え込んでいた。このA作業所の分析を通して、障害者が抱えている障害の内容と現実を曖昧にしたり、作業所の目的を明確に持たない状態では実践共同体の新しい実践と体制の再構築という創造的な変革が出来ないことを示した。

第3章では、A作業所と同じく高次脳機能障害者のための支援施設として設立されたR作業所が、作業所としての目的とその性質を変えていった経緯を分析しながら、R作業所に参加している障害者の実践活動と参加の仕方の変容を詳述している。R作業所は当初は、その作業所の目的が曖昧で、メンバーにとってはこの作業所は自分が出来る範囲で仕事をすればよいという就労までの一時的な「居場所」という性格を強く持っていた。しかし、このR作業所はその後、共同体としての目的と活動の意味を大きく変えていくことになった。

第4章から第6章までは、R作業所が小規模作業所として開始した設立当初から今日の

就労継続支援 B 型事業所へと変わっていった中で、この共同体の実践の意味を当事者とその支援者がどのように共同的な活動を通して作り替え、また新しい活動のシステムを構築していったかその変容過程を日常の活動の詳細な分析から明らかにしている。

第 4 章では、R 作業所の設立当初、ここに参加している当事者の生活実態と、彼らが作業所をどのようなものとして位置付けていたのかを分析した。特にこの章では、記憶に障害を抱えている高次脳機能障害者が生活の場である R 作業所において記憶の障害が顕在されず、障害が見えなくなっている状況とその意味を分析している。この作業所は、設立当初は授産活動を積極的に位置付けることが出来ず、社会復帰までの一時的な居場所という意味合いを持っていたために、生産活動を行う場合には不可避免的に伴う記憶障害という現実を当事者も支援者双方も回避してしまっていた。このように、単に人が集まっているだけで共通の活動と目的を持つことがない共同体では障害を相互に認識し、それを共同的に克服していくという方向に向かうことはなかった。その後、この作業所は大きくその性質を変えていくことになる。

第 5 章では、R 作業所が障害者自立支援法によって小規模作業所から地域活動支援センター、そして就労継続支援 B 型事業所へとサービス事業を変更していったことに伴いながら、当事者そして支援者が積極的に就労の場として位置付けていくようになる。ここで、短期間で受注した製品を完成させるという具体的な作業の目標が生まれたことで、共同体に参加している者の様々な経験や技能を使いながら、共同的な活動を組織化していくことが計られた。このような現実的な課題解決が求められる中で、障害の現実とそれを相互に認識し、それを共同的に解決していくという障害の共同的な克服が可能になった。

第 6 章では、参加メンバー自身が自主的に作業に積極的に関与するようになり、彼ら自身の手によって共に働く場を形成していった過程を分析している。ここでは、障害の程度を考慮しながら効率的な作業の分担が計られた。また、新しい商品の製作のために必要な作業内容についてもメンバーが共有出来るような内容の表示、さらには記憶の障害というハンディキャップを克服していくための作業工程の可視化といった様々な工夫がなされ、実践されていった。このような参加メンバー自身による共同的な活動への参加を可能にするシステムの構築がメンバーの関係性と参加の形態を大きく変えていくことを明らかにした。

終章は、本論文全体のまとめである。R 作業所が設立当初の異なった目的を持って集まった人たちが一時的に過ごす居場所から、働く場所、就労の機会を提供する場へと変化していく中で、障害を障害として相互に共有し、障害を克服する様々な工夫を当事者自身が作り出していく新たな実践が展開されていった。

これまでもコミュニティの活動を共同的な実践として捉える実践共同体論が提出されている。本論文では、これらの研究成果を生かしながらも、これまでの実践共同体論では当事者の共同体への参加の軌道や、共同的実践の意味の共有過程、さらには当事者と支援者による実践と共同体の性質そのものの再構築の過程が十分に論じられていなかった点を克服している。これらの諸問題を実践に参加している人たちの実践的活動を継続的な観察と分析から明らかにした意義は大きい。残された課題として、R 作業所の変容過程を詳細な参加者の相互行為分析で明らかにすることや、実践共同体の変容に関する理論構築を目指すところがあるが、本論文は当該分野の研究に大きく寄与するものである。

よって著者は、北海道大学博士（教育学）の学位を授与される資格があるものと認める。